

第二部では、在日コリアン3世の金光敏さんの体験講演や、4つの教室の代表が自身の移住経験を語り、日本に住む難しさや母語の継承と意義について話し合った。

金光敏さんをはじめ皆様の話を聞かせてもらい、日本がいかにか、日本で共に住む移住者にとって住みにくい国なのかを痛感した。「日本に住んでいるのだから、移住してきた外国人が頑張ればいい」と、他人事のように受け止めて考えるのではなく、同じ

日本で暮らす移住者たちと共に、これからの日本について考えていかなければならないと思った。グローバル化が進む今の世界において、多文化共生を考えていくことは必須である。これからも、今回の会合のように多くの人びとと意見を交換し、日本が本当の意味で住みやすい国になるべく考えていきたいと思う。

●三田村 潤 (EIWAN 協力委員)

初めの一步！ 白河でサポーター入門講座

「初めの一步！ 日本語学習サポーター入門講座」を白河市で3月28日、花岡正義さんを講師に開催した。

白河市でEIWANは毎月2回、識字を目的とする読み書きを中心に学習する日本語サロンを行なっている。教えるのは、地元市民のボランティアがサポーターとしてマンツーマンで行ない、学習支援だけでなく、移住女性たちの良き話し相手となり、信頼関係が培われてきた。ニーズが高まり地域の協力者(サポーター)を募集することを目的に開催した。

当日の参加者は10人ほどで少なかったが、内容は初心者にとって分かりやすく、具体的な事例を含

み「なるほど」と勉強になり、花岡さんの「参加できる人が、できる範囲のことを提供する」「専門性は問われない」「一緒に学ぶ」……という話から、「私にでもできるかも」と励まされた。質疑でも、参加者からの具体的な質問に対して、花岡さんの長年の経験を踏まえた返答はとても説得力があり、学びが多かった。

また、一番嬉しかったことは、参加者の中で4月から日本語サロンにサポーターとして参加して下さる方がいたことだ。

新年度に入り、新たな学習者も加わり、7月には日本語能力試験もある。その中で地域のサポーターも学習者も、ともに、花岡さんが最後に話された「笑顔で楽しく」をモットーにやっていきたい。

●佐川曜子 (EIWAN 事務局)

福島移住女性支援ネットワーク (EIWAN)	
◆連絡先◆	〒960-8055 福島市野田町2-3-2 神野ビル3F東 電話：080-8215-1556 メール：eiwan311@gmail.com ホームページ http://gaikikyo.jp/shinsai/eiwan/ フェイスブック https://www.facebook.com/eiwanfukushima
◆献金先◆	郵便振替 口座番号：00920-0-144820 口座名称：福島移住女性支援ネットワーク



▲白河サロンでは、いつも勉強のあと、みんなが持ち寄ったフィリピンの家庭料理を一緒に味わう



福島移住女性支援ネットワーク (EIWAN)

Empowerment of Immigrant Women Affiliated Network

◆発行◆ 2015年5月11日 (隔月刊)

第8号

●外国にルーツを持つ子どもたちによる被災地からのメッセージ●

ふくしま子ども多文化フォーラム



4月5日午後、福島県須賀川市の岩瀬公民館でフォーラムを開催した。主催したのは「福島移住女性支援ネットワーク」「つばさ一日中ハーフ支援会」「福島多文化団体 心ノ橋」の3団体で、いずれも震災後に生まれた市民団体である。

第一部は「外国にルーツを持つ子どもとお母さんたちによる文化発表」である。

1. 「チングドウル」(仙台市の韓国語教室)
大人と子どもの合唱『君は愛されるため生まれた』
/韓国語で自己紹介
2. 「瀛華(いんか)中文学校」(仙台市の中国語教室)
海派秧歌『紫竹聆風』/萨克斯独奏『時の流れに身を任せ』(王琦)/葫芦丝独奏『月光下的凤尾竹』
/大人と子どもの合唱『捉泥鳅』『幸福拍手歌』
/傣族独舞『有一个美丽的地方』
3. 「IVY子ども中国語教室」(山形市)
唄 アナと雪の女王の「要不要一起堆个雪人? (雪だるま作ろう)」
4. 「福島多文化団体 心ノ橋」(いわき市の中国語教室)
子ども朗読「2頭の虎」
5. 「つばさ一日中ハーフ支援会」(須賀川市の中国語教室)
漢詩「春晓」/子ども劇『三匹の子豚』
/扇子舞「太湖美」

●●●

そして第二部では、大人たちによるシンポジウム「東北の多文化共生教育をめざそう」と並行して、子どもたちのワークショップを行なった。

シンポジウムは、金光敏さん(コリア NGO センター)が、在日コリアン3世としての辛い体験と、関西における民族学級の取り組みについて熱く語った。続いて、「つばさ」の城坂愛さん、「心ノ橋」の井手伶さん、「瀛華中文学校」の張迺婕さん、「チングドウル」の宋貞熹さんが、それぞれの教室の困難な現状と課題について、率直に話してくれた。

最後に、子どもたちがシンポジウム会場に合流し、「きらきら星」を中国語と韓国語で合唱して、フォーラムを締めくくってくれた。

参加者は、仙台市、山形市、いわき市からバスとレンタカーで駆けつけてくれた45人をはじめ、地元の「つばさ」とその家族56人、高校生ボランティア6人、東京や県内から来た一般参加者、また来賓として中国新潟領事館、仙台韓国教育院、須賀川市、須賀川市議、福島県国際交流協会など、計140人となった。文字通りの「手作りの学芸会」に、これ

だけ多くの方々が参加してくれたことに、感謝するばかりである。



参加者のアンケートに、こう書かれてあった。「自分の国だけでなく、他の国の現状も知ることになり、それぞれの大変さと頑張りに、いい刺激を受けた。今、自分が子どものためにやっていることに、もっと自信を持って続けたいと思った」

「＜違いを認める＞ために、私ができることがあれば、頑張ってやっていきたい。＜韓国につながっている自分がかっこいい＞と思うような教育に、貢献できたらいいなと思います。弱者、強者のない社会にしていきたい！」

2つとも、おそらく移住女性が渾身こめて書いたものであろう。私たちが1年かけて準備してきたことが、被災地に住む移住女性とその子どもたちに、たとえささやかでも確かな励ましとなったならば、これ以上の喜びはない。

●佐藤信行 (EIWAN 代表)

東北初！ 子どもフォーラム

4月5日、福島県須賀川市で東北初の継承語教室合同発表会が開催された。

宮城県から『チングドゥル』と『瀛華中文学校』、山形県から『IVY 子ども中国語教室』、地元の福島県から須賀川市『つばさ——日中ハーフ支援会』といわき市『福島多文化団体 心ノ橋』の5つの教室が出演し、140人以上の参加者で盛大にできたことに、主催者の一員として感無量である。

フォーラムの主旨は、震災復興の中で、多文化が共生する豊かな地域社会の実現をめざす移住女性と日本人の願いと思いを発信すること。各教室による母語＝継承語教育の実践交流を図ること。これら5教室の子どもたちと母親たちによる文化発表を通して、広く市民に、多文化の豊かさを感じてもらうこと。関西の多文化共生教育を参照しながら、「継承語教育」の積極的意味を確認し、東北において、外国にルーツを持つ子どもたちの教育ネットワークを作っていく契機とすること。

私は、フォーラムの企画から準備まで関わってき

た。最初はすごい大反響で、各教室からぜひ参加したい、交流したい、と。けれども、途中で何回も躓いて、困ってしまった。まずは開催日の調整。韓国語教室『チングドゥル』が4月新学期から民団に編入されることで、新学期前が必須条件であった。また、子どもたちの春休みで、お母さんたちの母国の里帰り予定が読めない中、開催日をいったん4月4日に決めた。でも、岩瀬公民館から、市のイベントで使えなくなると連絡が入り、各団体と連絡を取りながら、4月5日に変更した。その後、各教室の先生や生徒たちの多くが一時帰国となった、春休み中は教室も休みで合同練習ができない……などの理由で、5教室のうち4教室が参加中止との連絡が入り、悩む日々が続いた。

何度も何度も、フォーラムの主旨を皆さんに伝えた。参加して発信することこそが大事で、残っているメンバーだけで頑張ろう、やり方も各自自宅で練習するように切り替えてやりましょう、とアドバイス。

何とか理解していただいて、やる気がまた盛り上がったようだ。当日は、体調を崩している方も、ケガされた方も車イスで参加してくれた。本当にみんなの協力と努力が実って、フォーラムは成功に導かれた。みなさんに感謝！

そして、フォーラムの最後に、良いニュースを耳にした。新しい継承語教室の誕生、郡山市で『日中文化交流会 幸福』ができたことである。『つばさ』の副会長が、須賀川市の隣の郡山市で、新たなネットワークを作ったのである。

このフォーラムを機に、福島県、そして東北において、外国につながる子どもたちの教育ネットワークがもっと広がるよう願っている。

●裘哲一 (EIWAN 運営委員)

感動、そして課題

フォーラムでチングドゥルが披露する歌は、「君は愛されるため生まれた」という韓国の歌に手話を付けたもの。この歌の歌詞は、とてもすばらしく、私たち一人一人がどれほど大切な存在であるかを、歌ったものである。私たち、多文化の子どもたちに

はビッタリの歌である。

他の継承語教室の演技や歌もすばらしく、子どもたちの無限の可能性を感じた。日本社会が、彼らの無限の可能性に、もっともっと気づいてほしい、そう感じた次第である。

第2部のシンポジウムでの金光敏さんの話からは、在日3世としての苦悩と経験、そして現在の活躍を聞き、日本で多文化の子どもを育てている私たちに教訓を与えてくれた。移民1世の私たち父母とは違って、自ら国籍と住む場所を決めているわけではない多文化の子どもたちは、抱えている悩みも違う。先輩となる金さんの話を聞き、力強く生きている先輩の姿が子どもたちには刺激となったはずであろう。

しかし、この日、最も私の胸にひびいたのは、つばさの副会長さんの「疲れています」という一言である。多文化共生は、一人で頑張ることができるものではない。しかし、これまでなかった取り組みを実現するためには、結局、誰かが自分の時間、家族の時間を犠牲にしなければならない。東北で自生的に作られて、運営されている継承語教室は、どこも、心あるリーダー的存在の犠牲の上に成り立っているのが、現状であろう。

彼女らをどのようにサポートしていくか。各地域社会は、それを真剣に議論し、できるだけ早くサポートの仕組みを作らなければならない。心あるリーダーたちの情熱と体力が限界に達する前に。

●李善姫

(前チングドゥル理事兼教師／EIWAN 協力委員)

多文化の子どもたち

フォーラムが始まるまで、私は今回のイベントがどのようなものになるのか、相当に不確かだった。主な理由は、主役である多文化の子どもたちにとって、また地元の人たちにとってこのイベントがどのように受け止められるのか、うまく想像できなかったからだ。

実際のイベントは、期待以上だった。舞台でのパフォーマンスからは、子どもも大人も練習して臨ん

できたことがよくわかった。シンポジウムでの大人たちの話からは、多文化のなかで子育てをすることの困難さをうかがい知ることでもできた。

モノ・カルチャーの傾向が強い地域で、外国にルーツがあることを子どもたちが肯定的に感じていくことは決して容易なことではないだろう。そうしたルーツがあるということで、周囲から傷つけられることもあれば、言語能力や他国についての知識などを過剰に期待されることもあるかもしれない。そうした子どもたちのために大人ができることは、ルーツに関わるアイデンティティを子どもに押し付けることではなく、子どもたちがそれを選択する機会を用意してあげることなのだろう。

今回のフォーラムが、外国にルーツを持つ多文化の子どもたち同士が互いの存在を知ること、自分たちのアイデンティティの戸惑いと楽しさを共有してもらい最初の一步になれば、と思っている。

同時に、このイベントが地域の人たちからも気軽に参加できるものとして、継続展開していくことを期待している。わずかではあったが、来賓客でもなければ、多文化教育に関連する活動をしているわけでもなさそうな地元の子どもの連れの参加があった。今後、こうしたイベントが、多文化の子どもたちや親たちの状況が、地域社会から切り離された「特殊異質な」ことではないということを、地域に知ってもらえるきっかけになれば、と願っている。

最後に、フォーラムの企画・準備に尽力くださったみなさんに、この場を借りて感謝します。

●土田久美子 (EIWAN 運営委員)

誰もが住みやすい社会

このフォーラムでは、福島県、宮城県、山形県にある5つの継承語教室が参加し、それぞれの継承語の勉強の成果を発表した。継承語教室とは、日本へと移住されたルーツを別に持つ方々が、日本で生まれた自身の子どもの世代へ母語を教育するための教室である。

第一部では、それぞれの教室が歌や踊りを通して、各国の文化を紹介し、皆で楽しみながら共有した。